

トルコ アンタルヤ県*の農業

1. トルコの概要

トルコと聞いて何を思い浮かべますか。イスタンブル、アンカラ、地中海、東西文明の十字路、オスマントルコ帝国、と出てくれば大丈夫です。旅行経験者ならトロイ、カッパドキア、パムッカレ、ノアの方舟のアララット山。農業関係者であれば、アンゴラうさぎとアンゴラやぎ、日本が輸入しているトルコタバコ葉、トマトピューレ、金ゴマ、ヘーゼルナッツ、カーネーション。鉄道愛好家には、憧れのオリエント急行の終着駅 イスタンブルのシルケジ駅があります。

でもトルコは、何となく遠い国で具体的なことはほとんど知らない人が多いと思われまます。実は私もトルコに赴任するまで、トルコのことは何も知りませんでした。私は2006年6月から2008年6月までの2年間、国際協力機構（JICA）のシニア海外ボランティア（SV）として、地中海沿岸の都市アンタルヤにあるアク

デニス大学 農学部に着任してからトルコのことを知り始めたのでした。

トルコの国土は日本の2.1倍、でかい国です。でもアメリカCIAのデータには「テキサス州より少し大きい国」と書いてありました。人口は日本の約6割、大雑把に言って人口密度は日本の四分の一です。

成田空港から直行便で西へ約12時間飛ぶとトルコ最大の都市イスタンブルに着きます。イスタンブルの人口は1,010万人、ローマ帝国（紀元前27-395）、東ローマ帝国（395-1453）、オスマントルコ帝国（1299-1922）と三つの帝国の首都として栄えた歴史の都で、世界文化遺産になっています。それこそ街中が歴史遺産です。観光でブルーモスク、アヤソフィア、トプカプ宮殿などを訪れると2000年の歴史の偉大さ、荘厳さで圧倒され、鳥肌が立つほどです。

図1 トルコ全図*



トルコの歴史は紀元前7000年以前には人の住居が認められているそうです。そ

して、紀元前 6000 年ごろには新石器文化を示す集落が作られていて、世界最古も町のひとつとされています。紀元前 1600 年代のヒッタイト王国は世界で最初に鉄器を使用したと言われています。とても永い歴史のある国です。

オスマン帝国の最盛期、16 世紀には版図を三大陸に拡大して、東西はアゼルバイジャンからモロッコに至り、南北はイエメンからウクライナに至る広大な領域に及びました。

オスマン帝国の末期 1920 年国土分割の危機が迫り、ムスタファ ケマル将軍（初代大統領）指導の下、諸外国の軍隊を撃破し、1923 年トルコ共和国を成立しました。そして、政教分離・一夫多妻制廃止・男女ともに教育義務化・女性参政権の実現・太陽暦の採用・ローマ字の採用・公の場所での男性のトルコ帽と女性のヴェールの着用禁止など近代化を一気に進めたのでした。

表 1. トルコの基礎データ*

国名	トルコ共和国
総面積	780,580k m ² （日本の約 2.1 倍）
総人口	71,158,647 (2007 年 7 月推定) (日本の 0.56 倍)
首都	アンカラ（人口は 1200 万人）
言語	公用語はトルコ語、アルファベット使用
宗教	98%がイスラム教、主流派スンニ派 憲法で信教の自由が認められている
民族	トルコ人 80%、クルド人 20%
政治	三権分立、世俗主義を標榜。政教分離原則： 政治にイスラム教を持ち込まない。
経済	工業（自動車・電化製品の生産と輸出） 農業、観光業

2. アンタルヤ県の概要

イスタンブルで国内線に乗り換えて、東南へ約 1 時間 15 分でアンタルヤ県の県庁所在地アンタルヤに着きます。成田空港でチェックインしてからアンタルヤ到着まで乗り継ぎを含め約 18 時間かかるのです。確かに遠い所です。

図 2. アンタルヤ県全図*



アンタルヤ空港の外国人旅客数はトルコ第一位で1516万人（2007年）でした。トルコ観光事業の首都とされています。

アンタルヤは地中海沿岸にある世界的に有名な海浜リゾート地で年間800万人の外国人観光客が訪れます。まず何と言っても美しいビーチと海、海岸線は600kmに及びます。次に標高3,000mクラスの山々、世界文化遺産クラスの遺跡がごろごろあります。同じ地中海沿岸でも、スペイン、フランス、イタリア、ギリシャなどに比べてトルコは物価が安いのでドイツ、イギリス、ロシアからの観光客が多く訪れます。また、それらの国々の人々が老後を過ごすために住宅を購入し、住み付いている街がたくさんあります。

アンタルヤの歴史は古く、街は紀元前150年にペルガモの王アタロスII世がアタリア（現在のアンタルヤ）を自分の海軍艦隊のために開きました。その後すぐに当時地中海全域を支配した巨大国家共和制ローマ（紀元前509-紀元前27年）の一部となり、その共和制ローマの繁栄と共にキリスト教が広がりアンタルヤは発展しました。旧市街（カレイチ）はこの時代の建造物が多くあり、今は貴重な観光資源になっています。県内にはクサントス（世界文化遺産）を始めとして、ペルゲ、テルメッソス、アスペンドス、シデ、ケコヴァ、アランヤなど多くの巨大な遺跡があります。市内にあるアンタルヤ考古学博物館は何度訪れても新しい発見のある凄い博物館です。

表2. アンタルヤ県の基礎データ*

県名	アンタルヤ
総面積	20,723 km ² （四国の約1.1倍）
総人口	1,489,000（2007年推定）
県庁所在地	アンタルヤ 総人口 775,157（2007年）
産業	観光業及び関連産業、農業

3. アンタルヤの農業

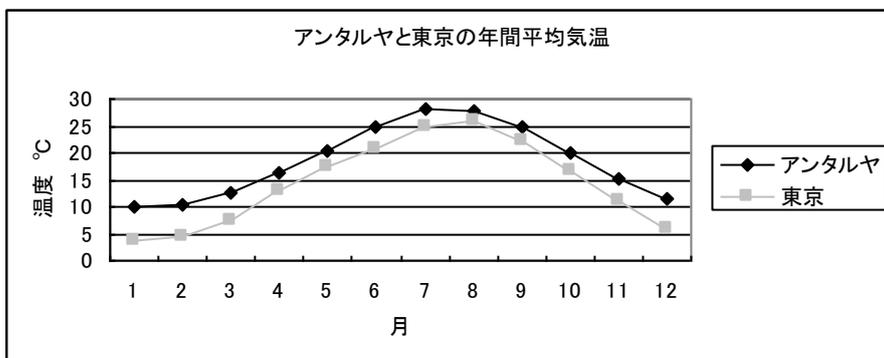
1) アンタルヤの自然

アンタルヤ県の面積は日本の四国より大きく、県面積の78%は山地、10%が平地、12%が傾斜地です。東西に伸びる地中海海岸線は約600km、南北は海岸線より約5km~30kmと北へ行くほど高地となり、東西に伸びているトロス山脈は標高2,500-3,000m級の山々が連なっています。

アンタルヤ県の気候は地中海式気候、

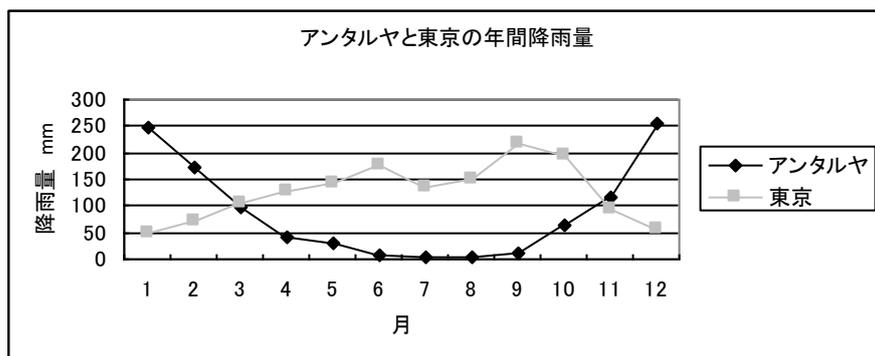
海岸沿いは比較的温暖な気候、内陸の山間部は標高によって気温が下がります。特にアンタルヤ市街は海岸にある都市ですから温暖で、年平均気温は18.5℃（同東京14.5℃）、年間降雨量は1,052mm（同東京1,523mm）、夏は降雨がなく高温、冬は降雨があり低温ですがめったに零下にはなりません。海岸から北へ丘陵地・山岳地へと行くに従い気温は低くなります。

図3. アンタルヤと東京の年間平均気温 降雨量



出典：World Climate

図4. アンタルヤと東京の年間降雨量



出典：World Climate

2) アンタルヤの農業

当地の農業は園芸と畑作(露地栽培と施設栽培)、畜産・酪農などがあります。特徴としては平野部で冬季の温暖気候を利用した野菜と花の施設栽培が特に盛んです。大型ガラスハウス・パイプハウスでは、栽培管理が比較的容易なロックウール水耕栽培が多いのですが、水耕栽培は初期投資が多額なため、大型企業が経営しています。初期投資は比較的少ない中型パイプハウスの土耕栽培(直植え)は中小規模の企業・生産者が行っています。

果樹類はかんきつ類とバナナが海岸沿いで、リンゴ・西洋梨・モモ・ブドウ・オリーブな

どが内陸の高原地帯で栽培されています。畑作は広大な平地・石がごろごろある傾斜地などで小麦・飼料用トウモロコシ・綿・ジャガイモ・甜菜等が栽培されています。ヤギ・羊の飼育は山間部で行われ、日常の肉料理に使われると共に、イスラム教の生贄祭に供されます。酪農も盛んでホルスタイン牛(白黒色や白茶色)が飼育されています。

乾燥気候のため、施設栽培ではもちろんのこと、露地の野菜・果樹の栽培でも灌水チューブによる灌水が必修条件です。このため、灌水設備の製造会社・設置会社は需要が多いようです。

表3 国土と県の面積・人口・農業就業者数

	面積 km ²	人口 単位：1000人	農業就業者数 単位：1000人
トルコ	783,562	70,586	12,593
アンタルヤ県	20,791	1,789	379
割合(%)***	2.7	2.5	3.0

出典：Turkish Statistical Institute (2006-2007)、***アンタルヤ県の占める割合(%)

表4 耕地と森林面積

単位：1,000 ha

	農耕地	野菜畑	葡萄園	果樹園	オリーブ園	休閒地	森林
トルコ	17,560	780	514	1,624	712	4,691	21,189
アンタルヤ県	11	40	2	41	11	49	1,119
割合(%)***	0.1	5.1	0	2.5	1.6	1.0	5.3

出典：SIS Summary of Agricultural Statistics, 2006、***アンタルヤ県の占める割合(%)

3) 野菜生産

アンタルヤ県には三大温室地帯デムレ、クムルジャ、アクスがあります。

アンタルヤ空港に着陸する飛行機から眺めるアクスの温室群には圧倒されます。

2006年の統計によれば、温室の総面積は

17,309ha、内訳はガラス温室が5,839ha(33.7%)、ビニール温室が8,802ha(50.9%)、ビニールトンネルが2,668ha(15.4%)です。

生産されている野菜は、果菜類ではトマト、緑トウガラシ、キュウリ、ピーマン、ナス、ズ

ッキーニなどが周年栽培されており、その他オクラ、イチゴ、スイカ、メロン、大型カボチャなどがあります。葉菜類ではパセリ、タチチシャ、コマツナ、ホウレンソウ、キャベツ、コモチカンラン、カリフラワー、ブロッコリーなどがあります。根菜類ではネギ、リーキ、赤カブ、ハツカダイコン、カエンサイ、セルリアク（根を食べるセロリー、肉とトマトで煮込む）などがあります。豆類はエンドウ、インゲン、ソラマメ、ササゲ、ヒヨコマメ、レンズマメ（ヒラマメ）、ラッカセイなどがあります。特にヒヨコ豆は煮込み料理や炒り豆としてよく食べられます。

日本で希少価値のあるアンティチョーク（キク科の花のつぼみ）は普通に栽培されていますが、他の野菜に比べて高価です。このほか少数派として時なしの青首ダイコン、ハクサイなどが最近よく見かけるようになりました。これらの野菜生産は、国内用はもとより、輸出用です。

大型ガラスハウス・パイプハウスでは、冬季の暖房は大型石炭暖房機棟（ロシア産の石炭を使用）があり、各温室に放熱パイプが配置され集中管理されています。中小型ハウスでは、ハウス内に石炭ストーブを設置して、水平に伸ばした煙突で放熱しハウス内温度を上げるのが一般的です。ストーブ周辺のトマト株が過熱で障害が出ているのを見かけたことがあります。

当地は夏季に乾燥気候のため、作物栽培は灌水が重要なポイントで、地下水をポンプで汲み上げ畝ごとに灌水チューブで灌水をし、液肥を施用しています。すなわち温室ではロックウール・溶液点滴方式の栽培で「清浄野菜」が生産されています。または地植え・溶液点滴方式の栽培が一般的です。前者は高額な投資を必要とするので、大資本の企業が行っています。何百もの企業が10ヘクタール単位の温室を経営しています。後者は中小の企業が行っています。県内どこへ行ってもトマト、トマト。これらの野菜は、国内用と輸出用です。

露地栽培でも灌水チューブの設置が普通で、この灌水システムを利用して液肥を施用する方法

がかなり普及しています。農業資材の販売会社や土壌分析の会社が、野菜類の生育に合わせた液肥の成分量をかなり細かく指導しているため、生産者は生育に適合する液肥や単肥を使って自分で調合し施用します。しかし、この方法は水の浸透する体積が限定されるので、根圏微生物の繁殖が限定され、根圏体積も少なくなるので、「美味しい野菜」、「コクのあるトマト」が生産できない一つの理由と私は推定しています。日本で普通に行われる「土づくり」、すなわち堆肥や土壌改良材をしっかりと施し、有機質由来の肥料を使って「美味しい野菜を作る」という栽培方法は見かけません。

灌水チューブの設備メーカーの工場を視察したことがあります。その会社では地下水（硬水が多い）を汲み上げるポンプ、石灰分を除去するろ過器、大小の灌水チューブとノズルなど金属製品とプラスチック製品などの一式を自家工場で作っていました。生産はフル稼働して、出荷は24時間体制でも需要に追いつかないと、うれしい悲鳴をあげていました。

野菜類の品種については、生産者は収量が多い、対病性品種を選び、流通業者は見栄えの良い皮の硬い品種、収穫後の日持ちが良い品種を好みます。そのため一般に流通している野菜の味は二の次となっているようです。大手スーパーマーケットに行くと、均一の大きさの真っ赤なトマトが綺麗な4kg箱に詰められて山積され販売されています。他方パザール（庶民相手の市場）では、二級品が安く売られていて、庶民にはお買い得、大量のトマトを煮込み料理に使うので、風味が少し劣っても問題がないようで、パザールなどでは主婦が一回に4kg-5kgと大量に買うのが普通です。パザールではほとんど全ての野菜と果物がキロ単位で売られています。

パザールでダンボール破片の値札に「オーガニック」、「ホルモン無使用」と書いた有機栽培(?)まがいの野菜類が出ていますが、認証を受けているようでもありません。消費者がかなり関心を持っているのは確かな傾向です。大型スーパーマーケットの青果売場で有機農産物はほとんど見かけません。

表5 主要野菜の生産量

単位：1,000 トン

	トマト	スイカ	トウガラシ	キュウリ	メロン	タマネギ (乾燥)
トルコ*	9,855	3,805	1,842	1,800	1,766	1,765
アンタルヤ県**	1,667	244	229	532	82	—

	ナス	豆類	カボチャ	ニンジン	その他
トルコ*	924	564	365	402	
アンタルヤ県**	190	50	56	—	116

出典：* FAO, 2006. **Antalya Economy with Figures, ACCI 2006

当地では野菜苗生産が非常に盛んで、大手業者が 40 社以上あり、周年生産を行い、主に実生苗を生産し、全国の農場・生産者に販売しています。培養土は国産品はほと

んどなく、ドイツからの輸入品が多く使われています。最近、業界では接木苗のよさも理解されて来ており、今後の普及が見込まれているとのことでした。

4) 卸売市場

アンタルヤの市内に、巨大な卸売市場があり、ここに県内・県外の青果物が搬入され、トルコ生鮮野菜果物の需要の約 65% が取引されています。卸売市場といっても、競り売りするのではなく、相対売りです。すなわち、生産者もしくは青果業者が大型トラック(20 トン積)で野菜や果物を持ち込み、トラックの荷台を陳列棚にして店開きする。そこへ買い手がやって来て品定めと値段交渉をし、話がまとまると、大型の台秤で計量して現金決済する。ここで売買された A クラスの野菜・果物はヨーロッパやロシア圏へも輸出されています。この市場の敷地に流通業者の事務所や農業資材店が多くあり、隣接の敷地に最新設備の農産物調整・パッキング工場などがあり活気にあふれています。

5) 乾燥野菜

トルコでは乾燥野菜が多く生産され国内で流通し、また輸出されています。温室が普及したのは最近 20 年間のことで、それ以前は冬季に野菜は少なかったために乾燥野菜が普及したようです。乾燥野菜は、トルコが乾燥気候のため加工が簡単なこと、永い厳しい内陸部の冬にも野菜を食べられるようにと生まれた「生活の知恵」からと推定されます。各種の豆類は、肉のトマト煮込み料理やスープに多く使われます。輪切りにしたトマト・ナス・小さいオクラをそのままを糸に通して乾燥した乾燥野菜が年中売られています。これらの乾燥野菜は料理前に水で戻して料理します。味が濃くてとても美味しいとのことでした。

当地に日本の「野菜つけもの」に相当する保存食は少ないようです。いわゆるピクルスがあり、小型きゅうりを丸ごと、キャベツ・ニンジン・未熟トマトをぶつ切りして重石なしで塩漬けし、そのままか、酢漬けし、ピラフと一緒に

に食べています。

6) 花の生産

県内の花の生産は、輸出専用生産と、国内向け生産に分類されます。輸出専用切花生産会社は約 30 社あり、1985 年ごろ会社が設立され、カーネーションのみを生産しています。これらの会社は、大資本とハイレベルの技術力で国際的競争力を持っています。アンタルヤのカーネーションが「母の日」用として、日本市場に輸出されています。しかし生産がカーネーション単一のために、マーケティングに問題があり、他種類の花への転換試みているものの中々難しいとのことでした。ほとんどの花の種子や苗はオランダ、イタリア、イスラエルから輸入されています。

私が視察したカーネーション農場では、パイプハウスの中で地植え栽培し、高品質のカーネーション切り花が生産されていました。収穫後冷房作業場で選別・梱包し、保冷トラックで次々に出荷され、空路ドイツへ輸出されていました。

一方国内向け生産者は市場が未熟なために、大資本や高度な技術が要求されないとのこと。生産している花の種類は、ガーベラ、キク、バラ、グラディオラス、カスミソウ、スイセンなどがあります。

トルコはチューリップの原産国です。春先のアンタルヤでは小さなポット植えが花屋やパザールで販売されているのを見かけました。また、市内の街路や公園に植えられて咲いているチューリップを見かけましたが、大きさと色合いはあまり華やかではありませんでした。新聞によれば、毎年 4 月初旬に「国際イスタンブル チューリップ祭り」が開催されて、約 70 種類のチューリップが市内に植えられて美を競っているとのこと。一方、チューリップのデザインはトルコ観光のロゴに使

われ、古くからモスクのステンドグラス、絨毯・絵皿・コーヒカップなどに優雅に描かれていて、トルコがチューリップの国であることを物語っています。また、トルコ人の大好きなチャイ(トルコの紅茶)を飲む小さなグラスはチューリップの形をしています。

アンタルヤの西方 60kmにある標高 800m の盆地状高原、コルクテリは、チャンピオンマッシュルームの産地として有名です。麦ワラ堆肥を生産し、これにフランス産種菌を混ぜて作る菌床を生産する会社が 7 社あり、県内外に販売すると同時に、同地ではマッシュルームを約年間約 18,000 トン生産しています。これはトルコの全生産量 38,300 トンの 47%に相当します。

7) 果樹生産

果樹類は、丘陵部及び高原で、リンゴ、西洋梨、ブドウ、マルメロ、カリン、モモ、スモモ、ネクタリン、アーモンド、オリーブ、ザクロ、イチジクなどが栽培されています。柑橘類のワシントンネーブルオレンジ、マンダリンオレンジ、レモンは海岸部で栽培されています。生育期間中に降雨がほとんどなく乾燥しているので、病気の発生は少なく、高原では昼夜の温度差があつて、糖度が高くなり、高品質の果物が生産されています。果樹園でも灌水チューブ設置又は樹間の灌漑が必須条

件です。エルマル(トルコ語でリンゴ)の 250ha のリンゴ園を視察したことがあります。高原の広大な平地に見渡す限りリンゴが栽培されていました。その地域には同規模のリンゴ園が約 50あり、5000-7000 トン規模の保冷倉庫会社が約 20 社ありました。アンタルヤ県の北に隣接しているウスパルタ県はリンゴの名産地で、年末の土日に 20 トン積み大型トラックがアンカラやイスタンブルに向けてどんどん出荷されている光景を見たことがあります。

アンタルヤ県と東隣のメルシン県でバナナが栽培されています。「トルコでバナナ生産」と聞いて少し驚いたのですが、かなり以前からトライされていたとのこと。場所は県東部のアランヤなどで、温暖な海岸沿いの南斜面です。栽培面積は約 4,000ha、この約 60%が大型温室栽培、他は路地栽培です。栽培に除草などしなくていいので手間がかからないとのこと、栽培面積は増加中。政府の補助金があり 4 年目からは、借入金を返済できる、効率のいい作物とのこと。「草取りをしなくてもよい作物で人気があるのだ」と大学の先生は笑って説明してくれました。

以前は高値で売れていたのですが、最近ではエクアドル産の輸入品のために国産品の価格が下がり、以前ほどの利益が上がりませんとのこと。

表 6 主要果樹の生産量

単位：1,000 トン

	ブドウ	リンゴ	オリーブ	オレンジ	温州みかん	レモン
トルコ*	4,000	2,002	1,600	1,536	791	710
アンタルヤ県**	66	279	47	370	22	—

	モモ・ネクタリン	スモモ	ナシ	イチジク	イチゴ	バナナ
トルコ*	553	460	318	290	221	66
アンタルヤ県**	14		42		18	66

出典：* FAO, 2006. **Antalya Economy with Figures, ACCI 2006

8) ドライフルーツとナッツ

トルコはドライフルーツの生産量が多く、重要な輸出品目であり外貨を稼いでいます。トップ3は干しブドウ、干しイチジク、干しアンズです。産地・品種・加工法の違いにより見栄え・風味・食感がことなり美味しいのです。

また、トルコはナッツ類の生産量・輸出货量ともに多く、外貨を獲得しています。トップ3は、ヘーゼルナッツ、ペルシヤクルミ、ピスタチオです。トルコの人々は、これらのドライ

フルーツとナッツは日常的によく食べます。干しイチジクを裂いて、そこにむいたペルシヤクルミを挟んで食べると絶妙の味がし、おやつにも酒のつまみにもよいのです。

9) 畑作物と米の生産

アンタルヤ県の主な畑作物は、小麦、大麦、ライ麦、エンバク、甜菜、ジャガイモ、ヒヨコマメ、綿、ゴマ、飼料用トウモロコシ、ピーナッツなどがあります。工芸作物はタバコ、アニス

(トルコの銘酒ラクに使われる香辛料)、ケシの種(種をパンやケーキに使う)などがあります。トルコのゴマ生産は年間 27,000 トン、内約 7,000 トンが日本に「金ゴマ」として輸出

されています。

畑作の灌水はスプリンクラーが使われるか畝間灌水、または灌水なしです。

表7 主要作物の生産量

単位: 1,000 トン

	小麦	大麦	ライ麦	エンバク	トウモロコシ	甜菜
トルコ*	20,010	9551	246	271	3811	14,452
アンタルヤ県**	412	205	0.5	7	92	68

	ヒヨコマメ	綿	ゴマ	ジャガイモ	ピーナッツ	米
トルコ*	552	900	27	4397	77	696
アンタルヤ県**	67	21	6	40	3	0

出典: * FAOSTAT, 2006. **Antalya Economy with Figures, ACCI 2006

お米についてお話ししましょう。トルコでは、パンが主食で色々な種類のパンがあり安くておいしいのです。レストランではパンは食べ放題です。米は日常的によく食べられています。まず、ピラブ(フランス語でピラフ)ですが、これはトルコがオリジナルの料理で、炒めた米を色々な種類のだし汁で炊いたものです。トルコではピラブがたくさん出されても、パンも必ず出ます。ピラブは色々な種類があって肉・松の実・干しぶどうなどが入っています。次に米のおかゆのようなスープが何種類かあります。また、米・

10) 農業機械

国土の広いトルコでは、畑が広大で細切れの畑はあまり見かけません。畑作の一筆は最低1ha 位で、トラクターも作業機も大型で勝負です。

農業機械類は何でもあり、トラクター、コンバイン、ジャガイモ・ニンジン・タマネギの収穫機、コットンピッカーなどが普及しています。また、灌水関係の機器、施設園芸用の機器も普及しています。これらの農業機械は国産品と輸入品があります。

トラクターはボトムプラウやデスクプラウでの耕耘作業はもちろんですが、トレーラーを牽引して色々な資材を運搬するのによく使われています。トルコでは中型トラック(4-5 トンクラス)が普及していないので、運搬手段として田舎でも市内でもトレーラー牽引のトラクターが市民権を得ています。メーカーは色々で、ドイツ(ドイツ社)、イタリア(フィアット

小麦・牛乳・ヨーグルトなどに砂糖を加えて煮たプディンがあり、冷やしてたべます。もち米はなく、もちろんお餅や団子もありませんから、何度説明しても理解されませんでした。お米の栽培は、ヨーロッパ側イスタンブールの西方バルドーが有名です。インデカ種、ジャポニカ種が栽培されています。トルコではとにかく大粒の米が珍重されます。その昔、アンタルヤでも栽培したそうですが、水田で蚊がわいてマラリヤが発生したため、中止したという歴史があります。

社)、イギリス(マッシーファーガソン、ニューホランド、フォードソン)、ロシア、チェコなど、旧モデルから最新モデルまで。よく見かけるのがマッシーファーガソンで代表選手です。石ころの多い畑が多いので、作業機は頑丈で肉厚な材質のようです。日本で普及しているロータリープラウはあまり見かけません。刃が直ぐに壊れるので使いたがらないのです。春先に友人の田舎へ行き、小麦の播種を見たことがあります。ボトムプラウで耕耘した後、丸太をロープで牽引し地ならしするのが一般的でした。麦類を収穫するハーベスターも各種あり、短い収穫適期に活躍しています。

11) 国際農業展示会 GROWTECH EURASIA 2007

毎年 12 月初旬に、アンタルヤ輸出センターで国際農業展示会 GROWTECH

EURASIA が開催されて、約 500 の企業と農業省・研究機関・アンタルヤ県農業部・大学などが出展していました。あらゆる農業関連の機材と資材が、トルコ国内はもとより、ヨーロッパ各国から搬入・展示されていました。展示物は、生産施設、生産資材、出荷調整機材、出荷資材などでした。

アクデニス大学農学部の展示ブースでは、研究成果として「パック詰めザクロ」、「バナナの細胞培養苗」、「リモートセンシング」などと共に、私が進めている新作物導入としてのサツマイモ、エダマメ、スイートコーンを展示しました。入場者は初めて見るサツマイモに関心が高く、多くの人から、苗の入手と栽培法をたずねられました。将来の普及の手ごたえを得ました。

私がこの展示会で感じたことは、農業関連資材と農業生産物の売買と物流に国境の制限がないこと。資材であれ生産物であれ、安くて品質の良い商品が市場を席卷するという事実です。トルコは農業国でありながら、農業関連資材(主に種子と農薬)と生産物の総計の輸出入バランスが輸入超過という矛盾があり、これをどう克服するかが大きな課題となっています。

農産物の品質管理について、EUREPGAP (ユーロギャップ)の提携会社が、農産物の安全、環境への負荷軽減などを啓蒙し、IFOAM (国際有機農業運動連盟)の関係組織が有機栽培とのその認証について、情報を提供していました。

4. アクデニス大学 農学部

アクデニス大学は農学部、医学部など 13 学部ある総合大学で、創立は 1980 年と比較的新しい大学です。学生総数約 22,000 人(学部学生数は 15,000 人、内農学部約 1,300 人、その他の 7,000 人は 2 年制の技術学校など)、大学院生約 300 人(同約 130 人)、教員約 600 人(同 72 人)。農学部は学内最大学生数の学部で、園芸学科・作物学科・畜産学科・食品加工など 9 学科があり、園芸学科は特に有名でトルコ全国から学生が集まり学んでいます。トルコには全国に約 120 の大学・短期大学があり、その内の 20 大学に農学部があります。

私は JICA シニア海外ボランティアの農業技術者として 2 年間当大学 農学部に派遣されて「日本の農業技術」を教えました。

講義は、日本の園芸、野菜栽培・果樹栽培、日本の食用きのこ、堆肥生産、日本の畑作物、有機農業、組織培養、肥料の実用的使用方法、マレーシアの熱帯果樹と有用作物(マレーシア・タイ・フィリピンで仕事した経験があります)など。

次に、新作物導入として、試験的にダイズ・エダマメ・サツマイモ・スイートコーンの 4 作物を学内農場で栽培すると同時に簡単な料理方を紹介しました。

これらの 4 作物の選択理由は、トルコに普及していませんが、世界的に有用な作物であること、栽培が簡単で、料理も簡単、美味しく栄養価値がある、などです。そして、これらの作物が普及し農家の庭先で栽培されてトルコの皆さんが食べることで、また 800 万人の外国人観光客が泊まるファイブスターホテルのレストランメニューになることが私の願いです。

トルコは作物の種類が多く、気候的に栽培条件が適しているため、「食料が足りている国」です。このため、大豆・エダマメ・サツマイモ・スイートコーンといった世界で主流の作物が、当農学部では余り注目されないのが残念です。私の業務を通じて、農学部の教員・学生の皆様が、トルコ国民のために、また将来トルコが指導・援助する国々のためにも、これらの作物に関心を持っていただけたら幸いです。

私のその他の業務として、学術交流を目的に、

- 1) 2008 年 7 月当農学部長が来日し農業視察と大学訪問する、
- 2) 当大学院生の日本での技術研修を申請、
- 3) 2009 年度日本国文部科学省の留学生奨学金制度での日本留学、などを企画しました。トルコと日本の交流の機会が出来ればと願っています。

*注 Antalya の日本語表記はアンタルヤまたはアンタリヤであるが、前者を用いました。この原稿は 2008 年 6 月、日本農業機械工業会の雑誌に寄稿したものを加筆訂正しまし

た。

*印の出典はウィキペディア

2008年7月29日

吉原久雄 (元 JICA シニア海外ボラン
ティア SV)

2008/11/20 一部修正加筆

付録 私のお世話になった人々

大学内

1. 医学部教授 シャヒン ヤザール博士、Prof. Dr. Sahin YAZAR (62歳)

トルコ日本友好協会アンタルヤ支部長。中学生の時、イスタンブルで日本の海上自衛隊の艦船を見学し、それ以来日本にあこがれ、日本ファンになったとのこと。アクデニス大学に JICA シニア海外ボランティアを受け入れるきっかけを作った人。私を含めて合計8名のシニア海外ボランティア(指導科目:柔道、合気道2名、理学療法士、造園、種苗生産、グループコーディネーター2名など)が同大学で活動した。

同博士は全く個人的なボランティアとしてシニア海外ボランティアの身元引受人に

なっていただき、大学内の業務体制の調整、体調を崩した時などお世話をしていただいた。ご本人曰く、「ボランティアのボランティア」、公私共に大変お世話になった。そのため私はヤザール博士に義理を欠かないように常に注意しお付き合いした。同協会の仲間、日本留学経験者やその友人達、トルコ人と結婚した日本人夫人達約 15 家族で、折あるごとに食事会や忘年会・新年会が開催されました。

私は大トルコファンになったので、日本にいるトルコ人に出会えば、なんなりのお世話をしたいと思っているが、ヤザール博士ほど親身になってお世話ができるかどうか、自信がない。

2. 農学部長 イブラヒム ウズン博士、Prof. Dr. Ibrahim UZUN (52 歳)

ブドウの分類学が専門。農学部で唯一大局的に物事を見て判断できる人物で、当初より私に対して正しく対応してくれていた。業務上また私生活でもよく世話になりました。

赴任当初は、私との会話で現地の農業に詳しい彼が優位を保っていましたが、しばらく後に彼が私の幅広い知識技能と経験を認めるようになってからは立場が逆転しました。農業政策、農業教育、有機農業やバイオ燃料作物などについてよく議論しました。

同学部の学部行事・学外視察・レクリエーションなどに必ず誘って頂き楽しく見聞を広めることができました。

また、個人的に自宅や山荘に時々招いてレンジン夫人の料理を頂きました。市内でのコンサートの時などは何時も一緒に出掛けました。

農学部の教授たちとは、数名を除き、業務上の表面的な付き合いはあるが、どうも懐に入って行けない、入ってこない関係であった。どうもガードが固かったようでした。

3. 学長 ムスタファ アカイデン博士、Prof. Dr. Mustafa AKAYDIN (62 歳)

私の業務上の責任者で、業務計画書・報告書を提出し、逐次業務の進展状況を報告した。赴任時の業務計画書で大豆とエダマメの導入栽培を説明した時、「ぜひ進めてください。大豆にはイソフラボンが含まれておりある種のガンの抗がん作用がある」と関心を持たれ激励して下さいました。

2007 年 9 月エダマメを初収穫し、同学長ら VIP に茹でたエダマメを試食して頂きました。また、帰国直前の 2008 年 5 月末、同学長をエダマメ・大豆・サツマイモ・スイートコーンが生育中のガラス温室 (2000 m²) にご案内し、栽培状況をご説明いたしました。「非常に感謝している」とねぎらいの言葉がありました。現在、トルコと日本の外交上の問題で SV 派遣プログラムが中断し、後任 SV が来なくなるため、学長は非常に残念がっておられました。

現在、同学長は全国大学学長会議の議長で、現政権が親イスラム教路線を採っているが、建国の父アタチュルクの政教分離思想（世俗主義）に戻そうと奮闘されています。具体的には、同国の憲法では従来「公共の場や大学構内で女性がスカーフを着用しない」と決まっていたが、現政権が 2007 年 9 月に「大学構内で女性がスカーフを着用してもよい」と修正しました。このため国内で大論争が起き、検察庁が現大統領・首相とその政党が憲法違反であると告発、野党も憲法違反と提訴しました。2008 年 5 月憲法裁判所が「憲法違反である」と判断しましたので、控訴中です。

国家全体と現政権の今後の成り行きが注目されています。また、同学長や農学部部長の再任にも影響してくるのです。すなわち、今年 6 月中旬に学長選挙が学内で実施されてアカイデン博士が再選された（2 期目）のですが、任命権は首相にあり、現在再任の保障はないのです。

同学長が描いている次の計画は大学内にトルコで最初の本格的「自然科学博物館」を造ることで、地元の人々はもちろん、外国人観光客にもトルコの大自然を知り理解してもらいたいという発想です。私はこの計画を聞いて「茨城県自然博物館」の素晴らしさを話し、同博物館の情報を提供することを申し出ました。

4. フェラムズ オズデミル博士、 Prof. Dr. Feramuz OZDEMIR (53 歳)

紅茶と緑茶の研究を約 20 年行っている同博士は、大学院博士課程の女子学生と 2007 年 11 月念願の日本訪問を果たし、静岡お茶まつり、学術会議に参加した。

その年の 8 月「日本訪問は決定しましたか」とたずねると、「参加申し込み時期を逸して、参加できなくなった」と元気がない。私はとっさに「事務局にメールを送って交渉しましょう」と思い付きの解決策を話しました。それからは静岡お茶まつり事務局の担当者と Eメールで折衝し、紆余曲折の後、「即申請すれば参加 OK」の返事を頂きました。参加申請書と発表論文の要旨を送付し、参加費を送金して訪問可能になりました。

憧れの日本に行き、学会で「トルコの紅茶事情」を発表し優秀賞を受賞、お茶畑や製茶工場を見学、抹茶アイスを感激して食べたとのことでした。滞在中の静岡市では、街の食堂で仲良くなった人に連れられてカラオケに行き、最終日の東京では、私の親友が銀座での夕食にご招待してくれたので、「日本人は優しい」と好印象を持って帰国しました。それ以降、彼らは私の面倒を親身になって見てくれるようになり、業務上また私生活でもいつも助けてもらうようになりました。

「何故そんなに親切なのですか」という私の問いに、彼は「トルコ人はこうなんだ」と答えました。彼以外、私とかかわった人たちは皆、本当に親切にしてくれました。

5. セルチュク サヤン博士、 Prof. Dr. Selcuk SAYAN (42 歳)

ランドスケープ学科の教授、英語が上手な新鋭の先生で気安く付き合ってくれました。以前造園学専門 SV の赴任時、SV の技術移転をする相手役（カウンターパート）だったので SV の何たるかを知っていました。

日本の庭園や都市公園に興味があり、よく私にたずねました。逆に私がトルコのことをたずねると、何でも答えてくれました。若いことそして役職が高くないので、学部長が回答に困る質問でも、私は彼に気軽に質問し、彼が上手な英語で答えてくれました。

6. 農場長 セルベット ムツル氏、Mr. Servet MUTLU (40 歳)

農学部にはキャンパス内の農場（路地畑 10ha とガラス温室 2ha）と学外のアクス農場（200ha）があります。温室ではトマト、路地畑ではコムギなどを栽培し、学部経営の重要な資金源となっています。この農場を仕切るのがセルベット氏です。

キャンパス農場での通常外業務である私の新作物栽培に、親身になって協力していただきました。多忙な中、トラクター作業の段取り、作業員の手配、生産資材の手配と加工（越冬用の農ビトンネル用支柱を自家生産した）などムリを聞いていただき、作物の収穫が可能になりました。私の帰国間際に心臓病が判明し、入院中のセルベット氏をお見舞いし、総合報告書の写しを差し上げ、お礼を述べ早期回復を伝えました。

7. 種子センター 農場主任 フセイン アビニ デュマン氏、 Mr. Huseyin Avini DUMAN (43 歳)

何故か彼は他の人夫とは違い非常によく働く人でした。種子センター農場責任者であるドクターの指示には余り従わず、自分の気に入った好きな野菜を栽培していました。

私が理論だけを述べるのではなく、毎日畑と温室に行って新作物を自ら播種・植え付けし、管理作業を行う姿勢を見て「この男は分かっている男だ」と判断したのか、彼は自分の仕事でないのに私の作物の世話をしてくれました。特に作物の灌水、地下水をタンクに溜めてパイプシステムで隔日に約 1 時間灌水する必要がありましたが、畑の状況を見て判断し必ず実行してくれました。また、サツマイモの初収穫約 200kg は全て彼が収穫してくれました。彼はサツマイモのことを「ジャポン ポタテス・日本のイモ」と呼んで栽培方法と苗作りを覚えてくれました。彼の助けがなければ私の新作物栽培は成功していなかったでしょう。彼にはいくら感謝しても足りないほどの感謝をしています。

8. グラフィックデザイナー オクタイ バルカン氏、 Mr. Oktay BARKIN (31 歳)

古谷 元 SV（アクデニス大学配属 合気道）の弟子で、私の合気道の兄弟子。国際

農業展示会用の大型ポスターやイラスト入りエダマメ栽培パンフなどは全て彼に作成してもらいました。私は農学部に属して業務を進めていましたが助手はおらず、いつも困っていました。こんな時オクタイ氏にお願いに行くと、二つ返事で自分の仕事を中断し、ポスターを作製してくれました。プロですから出来栄は上々、農学部の連中は、私が何処でどうしてそのような立派なポスターを作ってくるのか不思議に思っていたようです。彼の協力は非常にありがたく感謝しています。

9. コンピューター技師 フィクレット グルカン氏、 **Mr. Fikret GURKAN (34歳)**

大学コンピューターセンターの責任者。着任時よりC Pについて何時も優先的に対応してもらいました。農学部が私の事務室用に準備したP Cはトルコ語のソフト、トルコ語のキーボードのため使い勝手がわるいのでした。そこで、彼にお願いして日本語のソフトに変更してもらい使用していました。また日本から持参した私用のP Cも時々問題が発生、こんな時は彼に相談すると、直ぐに解決、誠にありがたい存在でした。

10. 大学院生

オズギュール アクデシル氏 **Mr. Ozgur AKDESIR (29歳・博士課程)** とセダット チタック **Mr. Sedat CITAC (28歳・修士課程)** の両氏は、私の業務と日本に関心を持っていました。私の直接の学生ではありませんでしたが、私と気が合いトルコ語の翻訳（トルコ語を英語に、英語をトルコ語に）、トルコ語のデータ収集、農学部内の雑用で私を助けてくれました。彼らの指導で、私はパワーポイントを自分で編集出来るようになりました。もちろん、私も出来る限り、私の農業についての知識技能や、日本と東南アジアの国々の農業、また人生について彼らに色々と教えました。

11. その他

毎日、職員用カフェテリアで昼食を食べているので相当数の教職員たちと知り合いになり、お互いにトルコと日本のことを教え合いました。

市 内

1. チュムール アジャール氏、**Mr. Cumur ACAR (35歳)** とエルマ夫人 **Ms. Erma ACAR**

アンタルヤに着任して始めに2ヶ月住んだ高層住宅の1階にあるトルコテレコム メルテム店（電話代理店）の店長。インターネットの接続でお世話になったのが始まりでした。いつしか彼の店にほとんど毎日たちより、トルコ チャイ（紅茶）を飲ませてもらうようになりました。彼の店に出入りする顧客や友人と親しくなり交際範囲が拡大し、一般市民の日常生活が良く分かるようになりました。彼はよろず相談と便利屋を引き受けてくれて、買い物・衣類の繕い、メガネ・携帯電話・時計の修理など面倒を見てくれました。彼は私をダシにしてハمام（トルコのムシ風呂）や飲み屋にもよく連れて行ってくれました。

150km離れた隣県にある彼の郷里（実家は酪農とコムギ・果樹栽培）へも何度か案内してもらい、田舎の生活を知ることができました。

2. エニス セビン氏、**Mr. Enis SEVIN (航空会社 客室乗務員、27歳)**

彼は同じ高層住宅に住んでいた青年で、メルシンの大学で日本語を専攻したが卒業後2年間全く日本語を話す機会がなかったとのこと。彼は私との出会いで日本語と日本に接することができ喜んでいました。時々会ってトルコと日本の文化や習慣について話をし、トルコのことを教えてくれました。また彼は英語が非常に堪能なので、私は英文報告書、英文寄稿文章などの添削をお願いしました。

3. JICA 研修経験者 アテラ コヌック氏 **Mr. Atilla KONUK (31歳)**

市内工業高校の教師、2005年11月から6ヶ月間、JICA九州でコンピューター研修を

受けた経験者でした。

2006年8月、海岸の遊歩道を散歩中のアテラとエスマ夫人 Ms. Esma KONUK に偶然出会い、「ブユルン・どうぞ」と私がトルコ語で道を譲ったら、「ありがとう」と日本語で返事が来ました。3人は笑い出してそれぞれが自己紹介、即友達になりました。

よろず相談、特に借りているアパートの契約や補修と家のPC問題は全て彼に解決してもらい、非常助かりました。お互いに家庭を訪問し、トルコと日本のことを語り合いました。

4. 日本留学経験者 ジハンビル メテン氏、Mr. Cihanbir METIN (68歳)

トルコ日本友好協会アンタルヤ支部 副支部長。第一回日本国費留学生として日本で勉学後、JICA で約20年間通訳・コーディネーターとして働きました。日本人婦人と結婚、約10年前に帰国してアンタルヤに在住。日本人・JICA のよき理解者で、ヤザール博士と共にシニア海外ボランティアの世話をさせていただきました。

ご年配者だけにちょっと面倒な問題、例えばアパートの大家さんとの契約更新などで助けていただきました。

5. 日本留学経験者 ニザム サバッシュ氏、Mr. Nizam SAVAS (59歳)

1979-1984年 日本国費留学生として東京農工大学に学び、大学院課程卒業。土日友好協会 アンタルヤ支部会員・元トルコ農業省 林野部の高級官僚。

彼とは不思議なご縁がありました。彼の日本留学時代に、彼は夫人と長男を同伴し府中市と小平市に住んでいました。当時私は東京都府中市の東京農工大の近くに住んでいました。

2007年暮れに私は始めてサバッシュ氏と出会い、彼の長女ミネさん(1981年生)と私の長女典子(1980年生)が、何と同じ都立府中病院で生まれたことが分かったのでした。28年後その家族がアンタルヤで巡り会ったという不思議。現在ミネさんはファイブスターホテルに勤める利発なお嬢さんで「自分の生まれた所を見たい」と希望していましたので、「私が案内するからぜひ来てください」とお誘いしました。

彼の専門が農業部門なので、よく色々な農場に案内してもらい、業界のことなどを教えてもらいました。

6. バザール仲間

毎日曜日、市内のバザールで買い物をして同時に自分の専門のために野菜と果物の調査・写真撮影をしました。その時必ず売り子や子供を撮影し、翌週にプリントを配布しました。総数は300名以上、写真は1000枚以上。私の撮影目的は野菜果物でしたが、売り子達は「写真を撮ってくれるおじさん」と勘違いしていましたがそれもよし。よい関係が生まれ、楽しみました。帰国前のころは買い物をしても代金を受け取らない、おまけをたくさんくれる、買わないのに持たせる、お茶を何杯も飲ませてくれると言う困った状態になっていました。

7. アンタルヤ合気道道場の仲間

同道場は約十余年前イタリア人によって指導を受け開始。現在は市立体育館に専用道場(約180畳)あります。

この道場を指導したのが、アクデニス大学 体育学部に配属された元S Vの薩美武男氏(六段、2003-2005年)と古谷 修氏(四段、2005-2007年)。両氏は体育学部で正規の授業で合気道を指導されました。

同道場は二人の指導でトルコ人弟子全員約150名全員が財団法人合気会認定の級と段を取得、トルコ国内最大の正統派の合気道道場です。その内二段5名、初段約30名。

道場のスポンサーはメフメット デミール氏(二段、65歳)、道場主 シェフェールコチャック氏(二段、柔道4段、43歳)、ハック ギュクチェオル氏(副道場主 二段、27歳)。練習は週3回(月水金)、18:00-20:00でした。

2006年11月、私は古谷氏の勧めで合気道の稽古を開始、同道場に週3日通い合気道を稽古しました。大学関係者とは別の年齢や仕事の異なる人々との交流で交際範囲が広がり、非常に有意義でした。古谷元SV帰国後、私はトルコ人有段者に指導を受け、2008年5月、元SV薩見先生の2級審査に合格しました。

彼らの中に、ファイブスターホテルのオーナーや、野菜栽培している人が何人かいたので、新作物の種子や苗を差し上げ、学外での普及に一役買ってもらいました。

2008年10月和歌山県田辺市で開催される4年に1度開催される「世界合気道セミナー」にアンタルヤの仲間10人が参加する予定なので私も参加し、その後東京観光を案内して恩返ししたいと思っています。

私の滞在中に、同地には藤田昌武師範(八段)、出口 勝氏(六段、本部道場稽古人)、薩美武男氏、竹林博高氏(五段、元SV)が来られて講習会と級・段審査が行われました。

このように、私は多くのトルコの人々お陰で楽しく暮らし、事故なくたいした病気もせず無事に任務を終えることが出来たことを心より感謝しています。

以上

—2008年8月加筆—

農学部長ウズン夫妻来日

2008年7月11日～25日、ウズン夫妻が公務として農業視察のために来日しました。私は日程作成、アポ取り、そして全行程を案内しました。そして充実した視察に感謝して帰国されました。

主な訪問先は

1. JA千葉みどり(千葉県海上郡飯岡町、千葉県最大の農協、 トマト生産者)
2. 東京都太田市場(東京都大田区、日本一の青果市場と生花市場)
3. メルシャンワイン(株)(本社 東京都中央区、ワイナリー 山梨県甲州市勝沼町)
4. 山梨県笛吹川フルーツ公園(山梨県山梨市、広大な果樹園と果樹博物館)
5. ブドウ・モモ生産者 有賀 光氏(山梨県笛吹市一宮町、私が学生時代からお世話になっている生産者)
6. 千疋屋総本店(東京都中央区日本橋、日本のトップレベルの果物販売店)
7. 東京農業大学 世田谷キャンパス、視察と国際農業開発学科ではウズン教授による「トルコの園芸(英語)」の講義。厚木キャンパスでは農場と農学部の視察
8. 農業展示会(千葉市幕張メッセ)
9. 農業・食品産業技術総合研究機構 果樹研究所(茨城県つくば市、)
10. 昭光通商(株) 千葉工場(千葉県袖ヶ浦市、肥料工場(化成肥料・有機肥料・液体肥料・被覆肥料))
11. 千葉県農業総合研究センター(千葉市)など。

観光では、東京国立博物館、浅草の仲見世と浅草寺、東京タワー、皇居前広場、銀座、ベイエリアとお台場、山梨県石和温泉、富士山スバルライン、三重県鳥羽市の御木本真珠島・水族館、伊勢神宮、茨城県自然科学博物館(水海道市)など。超多忙の2週間でした。

特に、私が学生時代からお世話になっている、山梨県笛吹市のブドウ生産者 有賀光・喜代美後夫妻にはぶどう園とモモ園を見学させていただき、茅葺きのお屋敷で歓待

していただきました。

また、伊勢旅行は私の妻ます子も加わって4人で行きました。伊勢市の竜川義秋氏には伊勢志摩の観光の段取り・ホテル予約・ガイドをして頂きました。彼の仲間のいる岩鏡の漁村にある料理屋で、魚料理フルコースとビール・お酒、ウズンさん曰く「ヨシハラさん、一日でこんなに沢山の種類の魚介類を食べたことはありません。今後もないでしょう。ごちそうさまでした」。竜川氏が予約してくれた超豪華ホテルで宿泊。

翌朝は4人で朝食ブッフェをゆっくりと頂き、その後モーニング コーヒーを飲みながら日本の農業生産、農業教育などを話しました。

それから伊勢神宮 内宮参拝、五十鈴川の橋を渡って緑深い広大な森の中を進み、トルコの巨大モスクにはない雰囲気の中、木造建築の本殿を参拝しました。昼食にとうふ料理を食べて、おかげ横丁に繰り出しました。ここは一転してお祭りみたい、わいわいがやがや、老若男女が笑顔でそぞろ歩き、おみやげの民芸品を品定め。ウズン夫妻は「こんな世界はシラナイヨ」とあっちでキョロキョロ、こっちでキョロキョロ、写真パチパチ、ああ忙しい、「けどオモロイナ」。

ウズン夫妻にとって日本滞在中は、見るもの聞くもの食べるもの飲むもの全てが、新しい珍しい経験、レンギン夫人は行く先々で写真を撮り、何でも食べてその内容を私に確認していました。

成田空港で別れる時、ウズンさんは「ヨシハラさん、私はトルコの科学者の中で最高の日本旅行ができました。どうもありがとう」と言ってくれました。レンギン夫人は「チヨーク テシェキュ エデリム、大変ありがとう」と言って涙ぐんでいました。

以下は後日私が訪問先に出した礼状の一例です。

千葉県農林総合研究センター
センター長 農学博士 宇田川雄二様
企画経営部 企画情報室
研究員 下條美加様（ご担当）

アクデニス大学 ウズン農学部長夫妻の日本農業視察のご協力に対するお礼

拝啓 盛夏の候、貴センターにおかれましては益々ご清栄のこととお喜び申し上げます。さて、過日トルコ アクデニス大学 ウズン農学部長・教授の日本農業視察訪問の際は、ご多忙の所色々ご配慮頂き、ご親切ご丁寧な対応で情報提供と視察案内をして頂き誠にありがとうございました。

当日は、貴センター職員全員でご対応頂き、各部門のご研究についての説明と、場内見学案内をしていただき感謝いたします。

ウズン農学部長は 15 日間の日本滞在中に農業関連の 14 事業所を訪問し、各事業所で歓迎されたこと、研究内容や事業内容をお教えいただき視察できたこと、その内容が素晴らしいこと、設備が整っていること、最新の情報を提供して下さったことなど、非常に感銘を受け感謝して帰国されました。

「今回の旅行で日本の社会と農業のことが少し分かり、非常参考になり、有意義であった。自分達はヨーロッパを向いて教育・研究をしているが、それだけでは充分でないことがよく分かった。日本の農業技術は優れているのでよく学んでトルコの農業と教育と研究に取り入れたい。また研究者を送るので何とか受け入れてもらい勉強させてほしい。」と感想を述べていました。

案内した私も各事業所で、皆様のご親切で適切な対応をして頂いたことに、心中より感謝いたします。と同時にトルコにはない高度に発達した日本社会の素晴らしさと機能を再確認し、嬉しく思いました。

私は既に JICA を離れていますが、数少ないトルコのファン（理解者）として、トルコと日本の民間外交に役に立てればと思っています。今後ともよろしく願いたします。先ずはお礼まで。

吉原久雄（元 JICA シニア海外ボランティア）

ご参考までに下記トルコとアンタルヤの農業情報と、当日の写真を CD にコピーして、別便にて送付いたします。

1. 「トルコの園芸」イブラヒム ウズン、英文（パワーポイント）
 2. 「トルコ アンタルヤ県の園芸」吉原久雄、雑誌 Farming Japan 2008 年 7 月号に寄稿、和文と英文。（ワード）
 3. 「トルコ アンタルヤ県の農業」吉原久雄、日本農業機械工業会雑誌に寄稿、（ワード）。
 4. 「トルコ アクデニス大学における日本農業の紹介」吉原久雄、2 年間のシニア海外ボランティア業務を総括（パワーポイント）
 5. 「ウズン農学部長の日本農業視察日程表」（ワード）
- 以上

—2008 年 11 月加筆—

アンタルヤ合気道道場仲間の来日

2008 年 10 月 4 日～17 日、同道場からメフメット デミール氏ら 12 名が来日しました。主目的は和歌山県田辺市（合気道開祖 植芝盛平の生誕地）で開催された第 10 回国際合気道連盟大会に参加することでした。

4 日午後、元 SV の薩美武男氏と古谷 修氏が関西空港で愛弟子達を待ち受け、田辺市へ案内、翌 5 日は観光で串本にあるエルトゥールル号遭難慰霊碑（オスマン帝国時代に訪日した軍艦）と和歌山市内の動物園を訪ねました。

6 日より 11 日までは例祭と著名師範が指導する講習会に参加しました。トルコからの参加は初めて、また一道場で 12 名の参加は一番多数だったそうです。

その内の 3 人は講習会中に「どうしても Hiroshima を見たい」と広島市の平和公園を訪問しました。

講習会終了後、古都京都観光 3 日間、そして 14 日夕方新幹線で東京に到着しました。

15 日早朝、薩美・古谷両氏の案内で、彼らは憧れの合気会 本部道場（新宿）に行き、道主植芝守央大先生指導の早朝練習に参加しました。皆は夢心地で練習をしたとのことでした。

同日朝 9 時、私は新宿のホテルに彼らを訪ねました。メフメットさん、セラッティン、ザフェール、ハック、エニス&フリヤー、グルセン（女性）、ムラト・医者（兄）、アフメット（弟）、ギョハン、ムスタファー、懐かしい顔ぶれがロビーに集まって来ました。お互いに笑顔でトルコ式の挨拶（男同士でも男と女でも握手をしながら左右の頬をくっ付ける）をしました。私は何か不思議な感じがしました。半年前別れた彼らと会えたこと、その場所が東京であったからです。元 SV 仲間で合気道をした岩井公男氏夫妻もホテルに来てくれ、夕方まで観光案内してくれました。

私は約束通りに丸二日間の東京案内を引き受けました。

初日の観光、先ず新宿西口にある東京都庁の展望台に上がり地上 100m の眺望を楽しみました。次は皇居 二重橋、地下鉄二重橋駅から皇居外苑の広大な庭園を通りぬけ二重橋の眺められる堀の手前で記念撮影。トルコにはない形式の建造物、皇居の堀の外で

したがアンタルヤの仲間たちは感銘を受けた様子でした。その後地下鉄を乗り継いで浅草へ行き遅い昼食、マクドナルド組とパスタ組に別れ各自の予算に合わせての食事でした。観光客の多い仲見世は見るだけでも楽しいし、家族や友人へのお土産の買い物は楽しくて仕方がない。集合時間になっても中々集まらない!!! これがトルコ人とあきらめて、待ちぼうけ。

夜はアンタルヤを来訪し合気道の級段審査を行った出口 勝氏 (六段) のマンションを訪問し、豪華な家庭料理の歓迎パーティー。プレゼントの交換、酒とワインに魚・肉・野菜をふんだんに使った日本料理を食べながら、日本のこと、合気道のこと話に盛り上がりました。

16 日も新宿のホテルで彼らと会い、秋葉原へ直行。電化製品 (パソコン・ビデオカメラ・デジタルカメラ・アップルの i Pod・小物の日本みやげなどを品定めし価格チェック。彼らはこの店の価格をトルコでの価格とドイツでの価格を比較してから、価格交渉、私の出番は余りありませんでした。昼食はマクドナルド組と万世のすき焼き組に分かれました。

その後、銀座へ行き自由行動 3 時間。銀座を散策、デパ地下とおもちゃ売り場、本屋・ソニービル・アップルの店などをウインドウショッピング。私がアップルの店でジャンパーに野球帽姿の大指揮者 小澤征爾氏を見つけ、挨拶をして握手と写真撮影をお願いしたら、気軽に応じて下さいました。医者 of ムラットに「小澤征爾氏を知っているか」と尋ねたら「知りません」と。簡単にプロフィールを解説、写真撮影を勧めました。すると彼は小澤征爾氏に丁寧な英語で写真撮影を依頼し、ハイポーズでカメラに収まりました。「トルコに行ったことはありますか?」「未だ行ってないよ」「ぜひトルコに来て下さい」「機会があれば行くよ」そんな会話が交わされました。

最後の夜は皆で新宿の和食レストランで和食を楽しみました。

その夜、私は自宅で私が撮影した彼らの写真を整理し、CD にコピーしました。また、小澤征爾氏指揮の「2002 年 ウィーンフィル ニューイヤーコンサート」CD のコピーも作りました。

17 日、午前 10:00、成田空港に行き皆に合いました。薩見・古谷両氏はもちろん見送りに来ておられました。私は写真 CD と音楽 CD を彼らに渡し、記念撮影と例のトルコ式挨拶を済ませ、見送りました。成田からトルコ航空の直行便でイスタンブールまで 12 時間のフライトです。

彼らとじっくりと話しする時間がなかったのが残念ですが、彼らが 2 週間の滞在で日本と日本人をどのように観察し、感じたのか本音を知りたいものです。ただ、確かなことは日本を以前より好きになってくれたことです。マーシャラー (素晴らしい)

以上

2008 年 7 月 28 日